9　堂本印象　松鶴佳色

昭和十年（一九三五）　紙本墨画淡彩
本紙各二〇二・三×四四一・〇

六曲一双

「南山三百」「進馬図」と同様、岩崎家からの献上屏風の内のひとつ。五双の中で最後に完成した本図は、他四双の屏風が着彩画であるのに対し墨色を主体とする。右隻では勢いよく流れる水を背景に双鶴が両翼を広げて高らかに声を上げ、左隻では堂々たる巨軀の老松と太い竹の間に三羽の鳩が姿を見せる。鶴や松は長寿を意味し、また松と竹は歳寒三友のモチーフでもある。鳩は当時の作品評にも「久遠の平和を象徴する」とある通りで、吉祥の意がふんだんに込められた画題と言えよう。

堂本印象（一八九一〜一九七五）は昭和九年に教王護国寺小子房の襖絵を描くなど、この頃から寺社の障壁画制作に携わっており、その参考とすべく京都の寺社を回って多くの障壁画を目にしたものと思われる。巨大な岩石や樹木が配された迫力ある本図の画面構成や、荒々しい松葉部分の筆致などは、桃山時代の豪壮な障壁画を強く意識したものである。また、堂本は本図に描く泉石の画想を練るために、大徳寺大仙院などの庭園を巡っては写生を行っている。

皇室への献上画ということで伝統性を強く意識した仕上がりとなっているが、黒と白の階調をはっきりと分けた明快な色面構成や、作者が「尋常の姿」ではないと語った竹の大胆な造形には、晩年に抽象画まで手がけることとなる作者独自の先進的な造形感覚がうかがえる。

〈右隻〉

〈左隻〉

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

花ひらく個性、作家の時代―大正・昭和初期の美術工芸
三の丸尚蔵館展覧会図録No.50

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社　東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成二十二年三月三十日発行

© 2010, The Museum of the Imperial Collections